

2005年：がん薬物療法の進歩と課題 Anticancer Drugs: Progress and Challenge in 2005

佐々木 康綱

埼玉医科大学臨床腫瘍科

Yasutsuna SASAKI

Department of Clinical Oncology, Saitama Medical School

これまで限定的な効果しか認められなかった固形がん薬物療法において、この10年間は、新たな時代の幕開けを告げる記念すべき時代であった。従来からがん薬物療法の中心的な薬であった殺細胞的に作用する化学療法薬には、Camptothecin 誘導体としての Irinotecan、Topotecan、Taxan 系化合物である Paclitaxel、Docetaxel、新規 Platinum 誘導体である Oxaliplatin、代謝拮抗薬である Gemcitabine、さらに経口フッ化ピリミジン製剤である Capecitabine、S-1 といった新規薬剤が次々と登場した。この結果、結腸直腸がん、小細胞肺癌、乳がんに加えて、これまで化学療法剤による延命効果がないとされていた非小細胞肺癌、膵がん、前立腺がんにも化学療法剤による確実な延命が大規模臨床試験により検証された。さらに、肺がん、頭頸部がん、食道がんに対する化学放射線療法の導入、乳がんを中心とした術前化学療法の開発、非小細胞肺癌に対する術後化学療法の展開は、ますます集学的ながん治療戦略の重要性を認識させる。

一方、がん薬物療法の理解に際して忘れてはならない点が世界的な情報の共有である。がん薬物療法の重要な視点である「標準治療」の概念が世界的に広く認識されるとともに、これまでのわが国特有の“local therapy”は、姿を消しつつある。それと同時に、海外ではがん薬物療法の専門医である「臨床腫瘍医 (clinical oncologist)」によって管理されている化学療法剤の使用が、わが国では多くの非専門医によって用いられている現実も明らかになり、がん薬物療法を巡って多くの医療事故とともに社会的問題にもなっている。その意味で医科大学における「臨床腫瘍学講座」の設置と「臨床腫瘍医」の育成は急務の課題である。また薬科大学においても臨床薬学の展開と相まって、臨床の現場に即したがん薬物療法の教育や「腫瘍専門薬剤師 (oncology pharmacist)」の育成の重要性が認識されつつある。今後新たながん薬物療法の展開を目指すにあたり、医療機関においては、医師、薬剤師、看護師を中心としたグループ医療の構築を大胆に図らなければならない。

これまでの10年間は、化学療法薬に加えて「分子標的薬 (targeted therapeutics)」が、新たながん薬物療法として登場した時代でもあった。この新しい薬剤群は、相対的に軽い有害反応のもと、時として画期的な臨床効果を発現する一方、多くの解明されなければならない課題を抱えている。「分子標的薬」の使用にあたり、これまで以上に臨床医には、がんの分子生物学的知識と薬剤の分子薬理学的知識が求められる。加えて「分子標的薬」の登場は、臨床と基礎を結ぶ新しい考え方でもある“Proof of Principle (POP)”と“Translational Research (TR)”の概念の重要性を認識させることとなった。さらにこれまでの化学療法薬以上に biomarker を用いた効果の予測因子 (predictive marker) の検討や、それに基づいた適切な症例の選択 (patient enrichment) が、開発的治療研究を行う上での重要な検討事項として挙げられている。薬効の評価基準として、化学療法剤の場合、これまで腫瘍縮小効果が延命のための surrogate endpoint として重要視されてきた。「分子標的薬」では、biomarker の検討とともに、これまで以上に延命効果そのものを正確に評価することが求められている。新たながん薬物療法の展開を迎え、臨床医学と基礎医学、医学と薬学の“cross talk”が、これまで以上に求められようとしている。

プロフィール

埼玉医科大学臨床腫瘍科教授

昭和大学医学部卒業、国立がんセンター中央病院医員、国立がんセンター東病院医長を経て2002年より現職。

専門領域：臨床腫瘍学、腫瘍薬理学